

災害が多発する東南アジアにおける子供たちへの防災教育の国際協働実践プログラム

- 1,2日目 出発からウェルカムパーティー
- 3日目 ダークツーリズム講義、メラピ山ジープ、中学訪問
- 4日目 火山災害からの移転先の村、リントスラジオ局
- 5日目 グループワーク（防災教材作成）
- 6日目 被災者インタビュー(洪水・土砂災害) ボロブドゥール遺跡
- 7日目 Jogoyudan村、バティック、BoKomiバドラン
- 8日目 カソンガン村コアハウスエリア、ドームハウス
- 9日目 Pelangi Beech
- 10日目 ICT Training, DRR Drill
- 11日目 Arsip Museum,防災教育教材GW
- 12日目 防災教育教材GW
- 13日目 防災教育実施、全体プレゼン作成GW・発表
- 14日目 ACPエキスパートセッション、学生発表、GALAディナー
- 15日目 コミュニティICT避難訓練、振り返り
- 16日目 シンガポール入国、消防博物館訪問
- 17日目 シンガポール1日観光
- 18日目 帰国



tips

活動の様子（動画）



- Q,現地の学生とどのようにして、コミュニケーションを取ったのか？
- A,お互い英語を使って意思疎通を行った。また英語が分からない時はジェスチャーなどを使って伝えたり、専門性が高いことを話すときは、翻訳機であるポケトークを使用した。
- Q,現地の学生と仲良くなったきっかけは？
- A,共通の話題を話したり、知っている曲を歌って盛り上がり仲良くなれた。
(AKB48や漫画・アニメなど)

DRR education at YEU Junior High School with Developed Game Contents

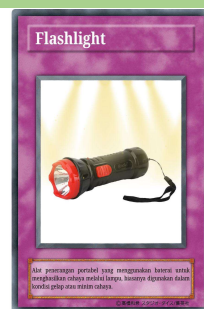
1班【防災〇×ゲーム】
二択のクイズを出し、正解の方に移動させるゲーム



3班【標識暗記ゲーム】
災害関連の標識を暗記させるゲーム



5班【サバイバルカードゲーム】
災害などの緊急事態に必要なアイテムをシナリオに応じて選択するゲーム



2班【避難手順ゲーム】
6つの避難手順カードを並び替えるゲーム



4班【ヤバイ！！】
緊急時に必要な判断力を養うゲーム



6班【避難情報カードゲーム】
災害の避難方法を実際に動きながら学ぶゲーム



Preliminary and Reflection Learning

- 事前学習
- ・JICA関西
 - ・人と防災未来センター
 - ・アジア防災センター
 - ・神戸モスク



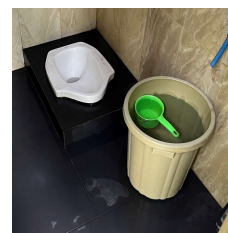
事後学習
振り返り



First Shocking Event -Indonesia-

インドネシアで感じた
カルチャーショック

- 1位 (8票)
- ・バケツの水でトイレを流す
- 2位 (7票)
- ・物価が安い
 - ・日本より湿度が低い
- 3位 (5票)
- ・辛い食べ物が多い
 - ・歩行者の概念がない



災害復興

【復興住宅】

・コアハウス

(2006年ジャワ島中部地震)

仮設住宅と復興住宅の、2つの機能を併せ持つ。
政府の助成金で必要最小限の家を作る。
→時間差で提供される支援金や独自の貯金を使い、増設という形で住居を広げることが可能。



・ドームハウス

(2006年ジャワ島中部地震)

耐震設計と、1階を涼しく2階を収納として使うアイデア。
地震や積雪、強風などにも耐えうる構造をしている。



<日本との比較>

日本では小さな家をたて新しい家が出来るまでそこに住むがインドネシアでは小さな家をどんどん大きくしていくところが大きな違いだ。これにより、その土地に住み続けることが可能でありコミュニティ崩壊の恐れがない。

コアハウス参考文献: <https://www.earthmanual.org/p18ja/>

【ダークツーリズム】

・地域復興

ジープに乗ってメラピ山周辺を巡るツアー

→被災地を観光地化した

<日本(熊本地震)>

被災前の状態に「戻す」ことが中心
被災地など大勢の人が亡くなった場所を観光地にすることに対して、反対意見が多い
例: 原爆ドーム



・経済復興

地元の人の年収が9倍になった

→なぜなのか?

1. ジープの運転手を現地の人が務める。
2. ツアー途中にカメラマンが観光客を撮影。
3. その写真をツアー終了後に販売する。

収入機会の増加

<日本(熊本地震)>

復興事業を「公共事業」にすることで収入機会を増やす
しかし、効果は一時的、

・考察

メラピ山噴火で被災した地域では火山灰で埋もれてしまった町を新しいものに造り替えることによって、半永久的な雇用機会、収入機会を生み出すことに成功した。日本でも災害によって死者はいないが地形的に大きく変わってしまった場所の活用方法として参考にできるのではと考えられる。

原爆ドーム参考文献:

原爆(げんばく) ドームについて - 広島市公式ホームページ | 国際平和文化都市

コミュニティ防災

【現状・課題】

・インドネシアでは、地理的な特徴から地震や津波、火山噴火などの多くの災害に見舞われやすい。
→そのため、防災対策の進展が喫緊の課題となっている。

・諸外国からの支援によって防災インフラの整備が進められているが、同時に脆弱な防災インフラを補う必要がある。
→そのために、コミュニティの対応力を付けることが不可欠である。
・災害に対応する知識や技術、自分自身を守るスキルを教えている。

2012年から日本赤十字社JRCは、インドネシア赤十字社PMIと協働で、村レベルで地域防災ボランティア組織SIBATを結成した。

このプロジェクトは、住民主体の活動により地域防災力を高め、村の持続可能性を踏まえた、発展途上国での地域防災の展開に向けた取り組みが注目されている。



実際に火山噴火の被害に遭った民家がそのまま展示されている。 → → →

現地での防災教育の結果

【現地の学生との防災教育】

・今回訪問した中学校では、地震が起きたときに備えた避難訓練を定期的に行っていた
・日本に比べるとインドネシア全体的に災害対策の進展が遅れている印象
・災害の多いジョグジャカルタでは児童に対する避難訓練などの教育が行われている(Yakkum Emergency Unitによる活動など)
・今回のプログラムで多様な災害の知識を児童に提供することができた
・防災教育を行った時の、児童の反応が良かった



インドネシアでの防災教育の様子

考察

・ジョグジャカルタ地域は、火山に近接しており南部には海がある地域でいろいろな災害パターンがあるのでそれに備えるために学校教育でより子どもたちの防災知識を高めるために防災教育を積極的に行っていたと思われる。

・防コミでは実際の火を使って消火活動をしたり煙を吸わないように煙が充満している部屋を煙を吸わないようにしゃがみながら避難するなどのリアルな体験をすることにより実際に起きたときに冷静に対処できるようにこのような訓練が行われていたと思われる。



<プログラムを通して得たもの>

・英語の使用する機会が増えた(主に経験として空港での入国審査や両替などで英語で会話を行ったため) また、英語が苦手でも相手に伝えようとする姿勢が大切だということもわかった。特に学生で集まりグループでプレゼン内容を考える際に自分の意見を伝えようとしたことで英語力や意見・交換調整力が身につけることができた
・初めはうまくコミュニケーションを取ることが出来なかったが15日間を通して、次第に心の地図から境界線が無くなった
・海外での2週間は長いようで短く、インドネシアで体験した異文化(辛い食べ物、おやつの時間、トイレや毎日の町全体で流れるイスラムのお祈りの音楽など)は貴重な体験になった。

<これからに向けて>

- ・今回インドネシアでのプログラムで開発した教材を生かして日本でも活用していきたい
- ・次回、会うことができた時に、お互いがコミュニケーションとれるように言語学習を頑張りたい。
- ・今後日本でGSが行われる際はインドネシアの学生のみんなが親切にしてくれたように次は自分たちがもてなしたい

